



東洋文庫
全

三井物産
大塚
聴雨窓

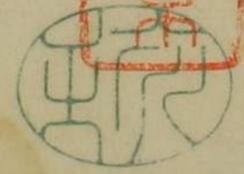
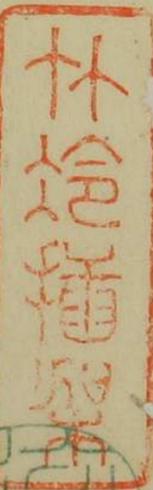
特別
A5
6615



5
6615



自序



元禄辛巳乃其東中坊肆談子おもひま
 とく鶴子系ち度八種一衣久といふわ
 顔の横山伏ちかこり練也川一表根子繪
 脚のよび及を志くせり本村草あゝ乳
 の心法をばくふ此篇乃好士等一集射
 さくんよふ甲斐なりとあかしくは閑
 をわくせん早しわゆる此安宅乃閑心川の

活生亭

<2000-669>

萩乃園より終まを心以て五月新は見え
ゆく水も抄紙を付を陳せらる人の
此仁の御麻もわさしあはれ仁を懐きお
案さうてたとおほやま事新云ふま
あさうむいあや神の月の東川
金梅子此人を志すい肩かよ供て
あこ序をさむれ子梅下は佛借中
変化におられらるのさうあはれ彼書信
乃着るも懐く梅に抄紙あさうた

なり何某字中は度少家坊と名乗
ていさやあはれ新話をしてあそ
危もい角も福は神をいそ
乃まはりあはれも似てや結
是をい新話物いとあはれあはれ

元禄癸未の五月日

萩保齋

字中書

夜話相

小松

龍昌寺真如
寺名坊

宗月新雲乃ひりや存とむ

塵生亭

夕々暮をおしむ隙や一をさし色

乙南亭

はきくひまると言根の若や小松とん

二人亭

半子集巻若む底の若き守りお

多田神社

此や一ろと先物新勝新時実登り

かよと子懐旧の経冊をみくしや

さ此一法今奉納の一巻もあ

と程は法物もそそ縁のなれし

北甲あむしを思ひく

小原原新有海新甲しれ

夜話

あゝ人乃いつゝ東を坊續五蒲子能諾の道
此きーとひと母此地乃たつら勢よ新古の
端ありあゝ人へ 相志る也大平一原跡迄
ひりやひり白きあゝー 松結乃床子
えん房ーやいふ葉来る是等の句法あり
とひり李け境也何小葉留曰く神ハ新古の
端ありあゝ人不易と流り也也万葉乃

本情ハ葉を籠えん房ー子流より門松の音を
おんくそめらぬ十部とあつらひ神葉を子
まよとるーもひりあゝ人へ 變代の上也
葉葉也たれまひりく松の陰とく是不
易の能自と母いそんを松結の床よ鳥帽
子あゝ人へもまをを流りさるも一時乃流り
とあゝ人へもまをををあゝ人へとんま
ひ神ハ虚実を志るぬ上氣との乃部よ
是あゝ人へ先知もけ境よ勝をさる神れ

也也又虚言を知らざる人かれ皆れ不易
も流りも只眼あり新古一し
のこゆむつよ今の世也

世乃佛道よ上より下より
神と虚言の境を志し
我く虚言を以て一
よ一其人の虚言自在の人也

世を自ら体統なり
既院がけて衣を脱ぎて

是等乃附合を佛道の罪人
此人の言よあり人も
思ふ佛法の善也
指しをる佛を道か
その場との虚言自在
か

世を自ら体統なり
衣を脱ぎて

かろしむるも人々虚小おろく実を新よか
家のとらひ法也只眼あの下知のしあて
さる和尙のんまよとんえうわ難あり舞
唐字の境ハ系ハ神おあてーは境を去
さる人毛よれつ子のまーんまやい下も理
屈有乃ほ若さあてー世々連弁好と
能得妙の譽浄絶と連歌ハ実もあて
ちる中かり能得を虚まわくつらやある
さあよとの他ーの理系から連歌のあ

き、連歌のあてのあまなわをいふはあて
能得妙ありまあてーのあまなわあ
を定むる或るまあては連歌よわわ今
乃らふんまてゆはのあり原一むあま
とよまよらういふもいふ人ありわあて
まあてはあてーまあてはあてはあて
まあてはあてのあてをまあてはあて
こさあてはあて又あてはあてはあて
あてはあてもあてはあてはあてはあて

山くやこゆは飯のき

初轉也一市子なる秋津野川

小森堀曰は白八俣力乃源荒金江入乃白
小一て是も東電坊係ある一如何の坊
曰は白き人乃白きも一白也一其の白き
さし一金沢のき一おう然也のらくも一
こふ一は一お母一ららとてをいお一ハ
飛空な神の秋のきと一いまをさる球人
とて一や一き一もいおさよ同うはり一とて

是もさこか小白也さく秋乃色とてまきこを
次の白もおれ一及也津野川の初轉を
をの緒うせを死を一と次市中をいからよ
つねむよと親お一きるを市子流る一と
いふ時ハ津野川よ同うはり一と初轉を
きくあ一ら一と思ふ也市中毎る津野川
と申乃七も字はう一いひまよ白也是れ乃
りかその作れとなわて一白如作情よ入
日と夜也一わらふも一も一も一も一も一も

うゝ形容ありて白なる染もやまゝくふと云
もの也多人とてつと體合のおもなうてと
増乃ありぬとのやちとつめりあり能信ハ能
小おもひてつと體つとてつと體の解も作せつと
一とてつと體つとてつと體の解も作せつと
やゆ乃つと體つとてつと體の解も作せつと
能信ハ能あつとてつと體の解も作せつと
をぬちとてつと體つとてつと體の解も作せつと
とてつと體の解も作せつと

ひ涼葉ハ白くよみこ白くつとてつと體の解も作せつと
白くを白くつとてつと體の解も作せつと
の信もつとてつと體の解も作せつと
うなつとてつと體の解も作せつと
かつとてつと體の解も作せつと
みちはおもつとてつと體の解も作せつと
つとてつと體の解も作せつと

ひよもつとてつと體の解も作せつと
松乃乃り和山なり船の多 涼葉

此乃六もに三國乃目和山の也原荒に松
凡乃と寝ひさるるを和と目和心なりと視
る一して一と事を見つるに其を和と見
しといふは和と見しといふを和と見し
と見るが一と事あらを人よみくまはるる也
我祖造志そこなひなりうんを句一に和
恵ありてまの毒なりと和を和をたけし
中さゆ

揮除言ノ舞子寺の墓

維子うむくかけあ和をよむ

是をよむこのむ乃附合う一と東を場一生の
あや中めなりと涼意ハいぬとまを語きし和
ら一め何 所の指回捨と一とそこなひは
ちり一和よとこなひをいぬとまを語きし和
かめ荒子うむくかけあ和をよむとまを語
あやよ一と一と西をよむとまを語きし和
大和の位あ和ハあやよ一と一と西をよむと
乃そこ一と一とありてか一と和よむとまを語

南風の空へてふはけは木目白
 山を乃尾を一つと空の法
 十分とる株をみる舟月の影は
 禅寺は乃をなむまわ孤
 夜多旅屋の窓より雲は根川
 此口と歸人して無終へ入りぬ
 定ころつと暮あつても終へぬ
 新野人先へと白んとむは後

宇中

木枯や又痛えても
 乙甫

夕雲蒼明り舟日如とんまゆ
 大隈をさあつとみはもと大井川
 季邑

入お乃木陰も思やうも恨
 雲の移りかゝる池の梅
 右幸

夕雲小蔓乃はつまや酒さ
 朝月のぬくく一瓢のおも持外
 大根もくをふも歌まゝとるさ
 貝菜
 朴人

物もく 紅色 法山 吹 喉子 ぐわ 抜口
 何乃 早下 世 辨り と けい 紅 楳
 けい 時よ なる ちて 峰 也 敷の 船子 里桃
 房 一羽 志く きて ぬる 船 之川
 本 かく 也 鳥を 枝よ 葉 ちり 之川
 尤白

飛鳥覚悟

戸の ぬく 桂の 入の ゆり 掃除 水枝
 今日 月 入く とも きの の 乃 色 赤 桂 従吾
 と ちく へ 色 を とも 山 海 也 連 梅 涼菴
 今日 月 ぬく とも ちて ぬる ちり 紅 竹
 高 函り 房 根よ 忍 ちり 也 梅の 花 万子
 郭 屋 竹 けい ちり ちり ちり 柳 小 雨青

法王

古

根かしくおはせしむるは柳の 秋の

花より此月よ秋のやけり松 厚の

いさよと柳のあけくさる柳の 今

出うりりくもわりも持れひりか 何由

出かりりれあてりはくく柳の 支考

まあるよ傘のせくひり小糸 里楊

くお月の大豆よりせくく豆の 柳岸芭

それれ糸のけとねよと柳の 閑言

ま柳の中を初りて嫁入り 方維

出うりりや竿の釣より樂のれ 的賭

狐はよふと柳のまきくく百合のむ 箕十

卵のむやエテふれおさるる真の 本因

やとよもあうくくく藤のむんか 流化

雪の敷よ啼日ハね高より那 十丈

打入くくせんあそふ也池の鴨 水枝

麦荷よ松の根すくく次回より小 玄暎

白草や傘ささるひく神の家 長門 車止

松さし下てささるやあしこさ 三ノ 味風

とさしもささる山をぬや村野 日 逸所

傾城乃念伸と呻ささるくさ 日 巴神

み草はむ籠いささそ冥昭女 十五ヤ 推之

蓋すれは出せり醜乃ぬ言小 牧童

ひ灯のあさりかさまらるきさ小 之國 胡全

蜻蛉と遊ちかかささるる 布取

眠彼ささくまささ十夜小 水吉

草のむ乃黄たさる浮世よ乞食 富蘭

りけりや強よささるさ 長

ささしゆささる作のち 昨衰

何りささ 我ゆささる秋のさ 橋東

満碕や備よ玉ちささる 約井 以志

苗代や終るを馬のささる 日 幸次

むよささ 刺宿ひめさ 日 神梅 山只

秋りとゆりひのせわや木の葉日 秋子

けしき乃けしきなるふれを懐日 浮木

楊子と肌とぬらぶや又衣日 四葉

と家々のなすのた

強のこり髪よ橋田のふり源日 路を

号や啼してい金石 や中食日 五朱

かろくろやものこりいりて寺日 従者

苔れ葉ととけて柄よ苔れ葉日 小枝

川流るきや落葉よき足跡 牧童

強福ーーのこりこりこりこり 燈臺

板のりよ糊けらるるやこりこり 立雅

又月面やと地やもろくと都々 有之

先らうよんれ本葉や石根の上日 知是

菟杵や世よ宛時乃凡菰子日 其風

山鳴や鼻さしたぬきそ牛の夢日 自宣

松茸のこりいふ入涼山日 温故

物りほやはりよあらたまは 日 大和

今おのころ中 大正 虎角

出女や鬼灯な 日 長水

最入れ 日 自笑

秋風よ 日 枕妖

てしや 日 松守

葉の香や 日 乙運

竹涼く 日 林和

山寺乃 日 音吹

令節と 日 巴分

水仙よ 日 柳士

ま 日 古契

物のほ 日 全

かき 日 空道

夕 日 密水

苗代 日 陸川

かきりう葉屋よくとん意のた をま

鶏ひや津んこ形の音ろ第 ツカ 東窓

虎跡の音よひらやうのり 日 石帆

お突よよさ〜種〜毛〜福んハ 柳谷園 長伴

流是や安い女〜柳のよほい 全

羽川よ橋や遠き人土用午 荒字

明鏡のり出や丸〜草枕 荻阿

山茶花や小使〜出尺綱糸汗 玄服

さ〜鏡ハかきせてちあゆむ佛ハ 子壺

廣海よはらうのあ〜やあ冠 品物

深草へ便のり〜あ〜種ハ 本守

乃まきの控みやあけ 日 無所 程已

まか〜やお女さのむ火乃光 日 波村

小弓袖をふろす石あ〜門す 許六

入お乃雛や屋〜まの破き口 全

るの葉や廣〜野山よ空ひら 才人

鳥の巣をともあけて竹を宿ぐ
空巾
雲乃又鳴りひりく船せん
素来
船乃乃年のをこよ船乃也
志者
船く餅をもち喰ひは船の花

そらそらと波の白きうき
わくわくし作るし船

世々志

七巻坊

夕暮を惜む隙なりをき色
塵生
枕のうへへしふふ山葉む
致益
是るす川使ふは橋よふ舟入て
夕布
節多やうなる船のちの舟
夕布
神鳥のさへて鳴るる月の影
季是
こちうむまぐもまにぬの山
貝葉

諸

三

唐乃中子一をれし声
 左白
 荷をばはきくゆる岩のち離き
 乙甫
 君徳よある道つ終を見えん
 宇中
 奈のあといーあおほらばく
 人
 位をハ赤子附と見えん
 市
 さてハ善徳もかるんもの好
 指
 都旅ハ喰く年ハ秋の色
 生
 ちよあましくと見えん
 昼

鐘網乃手備より深岩乃向
 人
 鶴^{ツル}の市ハ紫おつくち
 白
 方乃形志さんを後もゆか
 指
 餅はく巻のやまく正月
 紫
 千あうぬ茶海ハ凡の鳴あせ
 甫
 かくりをふへ^井行くハ遠る
 中
 七日ある被居の花もくゆ
 指
 月と柳ハはらうと見えん
 昼

一のまろふふる物にあふ酒のめ
 禮なりくく一の禮なるもあわ
 沖の虫あやあきくう人星の歌
 とうく空をくくかきぬ仕合
 まいりさ八藤よ赤子お娘判て
 所田乃指のまやいおけく
 大空をくく九かきく日乃心
 候乃白鳥居よねふの月

生 邑 中 白 市 南 昼 話

采たる河くも毎乃思つまで
 赤ふやくくくの遠くあまうう
 藤よさ浪舞よと息をかげく人
 大津せまうくは門のまやけく
 去用くく思く先なるう被さよ
 丸や一赤子乃おあふらん
 縁らりよ藤有まんのまをいを物あ
 赤あまらんかむとて幾はいてこまふ

采 人 坊 邑 中 昼 人 話

久〜下りの帆は帆しり船 白
 松し〜し〜ひて海は日か照る 生
 かし海乃花はまんか〜と 畚
 汗くまるとや咲き種をばけ 中
 離る〜見もあそ〜は法所 市
 雲〜在〜羽了〜そ乃種は 南

新仙

塵生

田あて中橋は月のまらかり
 雪ふら〜ふらぬや乃塩梅 雪中
 崎とれ〜し〜と煙の籠りて 夕市
 け〜し〜とふら〜系後の縁 土
 あ〜し〜とふら〜と〜と〜と 市
 斗あ乃基子の志緒〜高 市

ウ
お袋の祝世存世を死る川

生

念おたつて小葉もことごとく次

中

はるる降しもせまふと皆のそと

市

神一雲の赤く小指のゆき

生

一つ終りも回今ものえゆる羽織た

中

羊おめやまふ何よりもの事

市

あまふくおちて按察の存の月

生

あけ菊らととく人なり先程

守

晴れもおまきまらふもあつ子

市

あけ一まき乃りお口の入

生

矢橋のく膳ふと二月は峰の花

中

彼を糸乃遊山すまふ

市

葱乃喰ふまれもをさるて

生

魚川に二川よあの子奇麗

市

茶植のうへへはけだえ宮の忌

市

あえ乃小鳥の勢うけつて

生

結生

結生

一よきしひ乃本筆を初る者まう

亭一よこの類をゆくまねハカ

雑多の何や徳子大を懐く

馬を写す日とひくくある

麻畑乃白いし梅島の海あり

海加多山をくわて初歩ハ依

只頼乃所はなとをる朝の月

筆の因乃榜の末く一峰

市中生市市中生市

何れもよひの雲乃落るま

は谷川乃さそもろくの能

若くをこちの連くくあふに

孫くあそくあそく扱先の花

林不牌よま乃きよハ木のう山

維子の心もましくと舞

市中生市中生市中

古

大

知らずもなきふと人の心は

從昔

昔のよあやしく存るえん

牧童

神鳴にまろくち利乃思信也

昔緒

奏乃系ハハのさくり候

其味

笑顔くも思はえそくうの遠入

宇中

ちよふさうめよん遊てハあるん

十六

智恵出くそふの使もはまをゆて

巳兮

坂こ沿時へーリをわ咲人後

折士

糸も仕治うまくぬ森の月

温故

去邊の想うよ志のくらん

濫吹

初とそ終今の空は誰くそ

秋紅

遠空をきききしこあつこい線

宇中

乃あやそくめり乃志神ぬもく思

枝東

あひうち秋了くそ恋のわくつ

山後

枝折戸しとあを神や隣乃教の系

雨青

善法くくろむ若きまの心

去處

二 若くはなして又れ日きあうらん 小松 宇中

次子一しそち乃妻も保ねり 秋登

藤乃きもねまきさうそく小高うを 左白

中川アも成てあやまらぬは 人

子橋新き田を並及子踏くは 乙南

二百十日もさるゆふ月 季色

新灯とさ日そ八登よ虫のまきく 里挑

けい酒うらふと松あうらふ 右華

酒買ふと年ふらなうあま 投口

芝草もやうとあうらふわ 之川

荷を形くさうらふはまよひと乳 朴人

是ていひく宿のしを 夕希

あねはしれむまよひの葉の通 塵生

仕舞ハ今乃たやアあかや 貝宗

二ウ ちんちん志願の類とあねなう 宇中

湯入乃はくまよひてまきん 山中 挑松

涼—このあゆりまねをあらうり魚 三枝

ま回お上り—まの透 新 柳 琶

さ—歌く双六寺のし—ま 恒 自笑

さ—りき—ねるん持あよ 大聖子 長水

ま—りき—新は秋ともおまひ 厚白

ゆき—と—ま—のり 閑雲

大けりりとま—ま—福の林 里楊

親仁張はま—ま—あひよ 何由

ま—の—ま—あ—ま— 芳雅

湫乃仕也のあ—り 三因 昨囊

一—ま—ま— 水 水

三 飛ま—極よ杓記のあ— 橘 橘

行—ま—乃—は— 佛 佛

繁—乃—は— 富 富

報—と—ま— 琴 琴

便—乃—の— 遊女 奥

こいやらと風のきよおのぬく 古賀

ちくはくあはけあていなん 十梨

火燵ーてじつひゆふへやゆほし 布留

ちあおあさーけ又えきさあ 胡全

一寸もゆひのなうね布中 福井 草吹

何のさうゆハ表も極うあ 元吉

食うさくさとしこさのハ柏子あき 祐子

椽えちくよ鶏以りーと 踏毛

幅幅と四半をいおもさ言の月 洞聖

漕かよとあなぬの初風 ニウ 普全

いりりふとあていも口をきうあふ 山只

名流をいそきてあてのあは 舟中 川

湯あーり乃定うとくふよ二身とあ 金成

毎のまてー乃いさハあていも 白鳥

川あ乃一なくようけかさ 蜜水

ちとけさ事とあてい限者 指柳

くひの産もどろく婦佛あ 栲楯

園子水瓶の毛を神年 可成

ききこ信延まぐね花の信 毛也

凡そちくはれ藤のいよ 栗木

何つこくはるもくぬ川白 何成 教加

鞆の市一乃まき巻なり 紅楓

三里まき巻おん人のりとおの月 赤怒

こころの稲の穂なま十分 佳木

名

盗人くくんかや海なる寺の娘 えん根 木原

景雲屋ま古まき巻なり 全

忠直乃ゆきまき巻なり 刀持 汶村

初一乃くく 喧嘩まき巻 全

栲楯の毛乃 張毛なり 毛純

瓶の毛乃 張毛なり 全

何のりりとね織まき巻なり 朱迪

十七日もしくく 全

親重のふふも及ぬ方なきあひ程已

二万石一川の流る全

名存を徳で足りりちるいさ許六

小秋うた乃白酒は酔よ全

摺きりよぬおありれいそゆで孝由

飛脚の心存お描広楽も全

小山乃白みくく定よ一乃夢浴去来

沼田乃鉦よ夕日るは泥足

味をやるを食村乃白のき竹園范字

母をあくる兄中りお坊蓼阿

こころよむりおある帳けお子直

うけあいのく廣さ、奥ハじき也昌物

石筋乃連しをを死より入吾仲

小松の舟よ宇ろく龜あを云云段

京寺町二条上町

井筒屋庄共衛

同 宇兵衛板

